

### 3. 2017 年度活動概要

本研究会においては、大学レベルの英語教育で扱う言語現象に関して、研究会会員の今井隆夫は認知言語学の視点から、北尾泰幸は生成文法理論の視点から、都築雅子と高橋直子は語彙意味論とコーパス言語学の視点から、奉鉉京は第二言語習得論の視点から、そして大森裕實は歴史言語学と機能主義言語学の視点から新しい切り口を考究する。

本年度（2017）の特記事項としては、JACET 第 56 回国際大会（青山学院大学、2017.08.29-31）において「理想的教職課程履修生（英語）に求められる言語知識:言語理論・第二言語習得論からの提案—What Ideal Teacher-Trainees of English should Know about the Language: Suggestions from the Perspectives of Linguistics and SLA Theory」というタイトルでシンポジウムを実行し、理想的教職課程履修生に求められる英語の専門知識に関して、言語理論・第二言語習得論からの提案を行なった——(1) 教員養成のための「コア・カリキュラム試案」にも明記された「音声文法」（文法は書き言葉だけを射程に含む概念ではなく、話し言葉にもその原則的ルールが存在すること）の再確認と国際化時代の英語 Pedagogy に必須の重点事項について、また、歴史言語学の観点から、英語史知識が音韻形態（語彙）の理解に貢献することを提示；(2) 認知言語学の観点から、比喩表現の理解を中心に、これまで単なるルールの暗記として扱われてきた項目を採り上げ、ある表現がなぜそのような表現になるかという意味づけを行うことで、英語感覚を身につける方法を紹介；(3) 第二言語習得論の観点から、基本的な言語習得メカニズム、第一言語習得と第二言語習得の違い及び臨界期仮説を簡単に紹介した上で、第二言語習得に影響を及ぼす内的要因及び外的要因を採り上げ、学習者理解のために「英語習得・学習における主な why」の答えを提案した。

また、昨年度（2016）の第 55 回国際大会シンポジウムで発表した内容に基づき、次の論文を公刊したことも本年度の成果として報告しておきたい。

(1) 大森裕實「英語複文構造理解のための関係節考——応用文体論への予備的研究」『外国語学部紀要<言語・文学編>』第 50 号，愛知県立大学，pp.257-270（2018.3）

(2) 今井隆夫・北尾泰幸「言語理論に基づく関係節の明示的指導の効果」『一般教育論集』第 54 号，愛知大学一般教育研究室，pp.1-19（2018.3）

来年度も継続して研究テーマを攻究し、JACET 第 57 回国際大会において「理想的英語教員に求められる時制に関する知識 “What Ideal Teachers of English should Know about Tense based on New Approaches”」というシンポジウムを実施する。本シンポジウムに向けての準備を精力的に行なうことを通して、当該分野の研究を深めていく予定である。